

こうさつば

かどやつるい

高札場跡と角屋釣井

しゆくば

西国街道における近世宿場町として本陣が置かれた玖波は参勤・下向の大名や幕吏ばくりをはじめ多くの旅行者でにぎわい、同時に近隣地域からの諸物資の集散でも活況を呈していた。

せきど

なかでも、この地は廿日市、関戸へ向けて往来する旅行者のための人馬の継ぎ立てが行

はつと

おきて

じょうもく

われた交通の要所であり、法度・掟・条目・

きんれい

ていちんせん

禁令や次駅までの定賃銭等を記した多くの

せいさつ

高札や制札が掲げられた高札場でもあった。

この井戸は「角屋釣井」とも呼ばれて宿場の貴重な飲料水として、また最近まで西山社行

かんぎよう

みずごり

者堂の寒行の水垢離にも永く使用されてきた共同井戸の一つである。